

## 禪宗教團に於ける經濟生活上の態度に就て

福 場 保 洲

禪宗教團に於て、祖師方は經濟生活に對して如何なる態度を執られたか、全體としての教團は之に對して如何なる態度をとつて來たか。祖師方が執られた態度は、それが實踐の理念であつたと同時に實踐そのものであつたことは云ふまでもないことである。然し、全體としての教團に於ては、祖師方の態度が、その實踐の規準となつてゐたことは固より當然のことであり又事實疑を挿む餘地はないと思ふが、それは果して實踐されてゐたであらうかどうか。

生産と消費とを除いて經濟生活は成立しないのであるから、此等は經濟生活の二大中心部門をなすと云はねばならない。從て自ら交換蓄積所有等は之に隨伴する第二次的な部門となる。而て消費を豫想せざる生産は殆ど絶無である。當面は蓄積を豫想しての生産品も窮極は消費されるのであり、消耗される量が極めて少くその生産は直接消費の爲に行はれるのでなく他の物資の生産の爲に利用すると云ふ目的の爲に生産される物資も、何時かは消耗し盡される時があるのであるから、畢竟、生産は殆ど常に消費を豫想して行はれると云はねばならない。かくして生産と消費とは常に不

可分の關係に在ると云ひ得るのであるが、云ふまでもなく兩者は夫々異なる本質を有するのであるから、兩者を以て經濟生活の二大中心部門となすことは自然にして當然のことである。

斯の如く生産と消費とは經濟生活の中心をなすものであり従て最も重要なものであるが之に對して、祖師方は如何なる態度を執られたであらうか。云ふまでもなく佛者は生産者でない。従て佛者が自己の物質生活自體の爲に生産に従事したり他人に物資を供給せんが爲に生産に従事したりすることは佛者の本儀にかなふ所以でない。否な寧ろ信施によつて生活の資料を得ることが佛者の本義にかなふ所以である。又よしんば生産に直接従事することあるもそれは常に自然に佛敎生活の一場面となつてゐるが如きものであらねばならないのである。佛者の生産に對する態度に就ては以上の如く考へられるのであるが、佛者にその生活の資料を與へる人々——信施者に對して佛者は如何なる態度を執るべきであるか。信施者に對して執るべき態度は畢竟信施に對して執るべき態度と別のものでない。信施に對して執るべき態度は信施物の消費に對して執るべき態度に外ならぬのであるが、而も、信施物は生産された物であるから、信施物に對する態度は自ら生産者に對する態度に直接聯關するものである。わが禪門の祖師方は、之等に對して如何なる態度を執られ吾々兒孫に如何なる教示を残されてゐるであらうか。

白隱禪師は「於仁安佐美」(「白隱和尚全集」卷之五、三〇二)に於て、「見地透脱」底を得たる者も上求菩提下化衆生の大願心を鞭に進まざれば必ず魔道に墮すべきを説き、續いて次の様に云ふ。

「古へ百丈、黄檗、臨濟、興化、歸宗、魔麻等の諸老、毎日作務普請の鼓を鳴らして、拽石搬土、水薪菜蔬、七顛倒、八狂亂、千變萬化の上に於て、正念工夫、毫釐も打失せず、其綿密の行持、直に是れ諸佛の大禪定。佛祖も窺ふこと能はず、魔外も計ることを得ず。是を不離道場の行持と云ふ。」

又「遠羅天釜」(「全集」卷之五、一二八)に於ける黙照禪を批評する文に於て次の様に云ふ。

「若し又枯坐黙照を以て定めりとせば、枉げて一生を錯り、大に佛道に違せん。佛道に違するのみに非ず、大に世諦も廢せん。何が故ぞ、若し夫れ諸侯大夫は朝覲を怠り、國務を廢して枯坐黙照し……商賈は店戸を鎖し算盤を碎いて枯坐黙照し、農夫は犁鋤を擲ち耕耘を止めて枯坐黙照……せば、國衰へ民疲れ、賊盜頻りに起つて國其れ危からんか。……古へ禪門の盛なりし時、南岳、馬祖、百丈、黄檗、臨濟……等の諸聖、拽石搬土、水薪菜蔬作務普請の鼓を鳴らして、専ら動中の得力を求む。是の故に百丈大師曰く、一日なさざれば一日食せずと。是を動中の工夫、不斷坐禪と云ふ。此の風、近代地を拂つて盡く。」

寔に、僧にせよ俗にせよ、眞に向上の事に徹せんとすれば、徒に靜處を求めて「心源湛寂、黙照

枯坐、灰心泯智、寂滅空溝」の境地を求めず、「千差萬別の塵務の上、七縱八橫の世波の間に於て正念工夫相續關斷なから」しめねばならない。行住坐臥打坐看經作務普請、ペンを運び算盤をはぢき鋤鋤を振ひ銃を執る、「總に是れ正念工夫の全體」たる境涯こそ眞の禪的妙境である。若し禪がこの境涯の外に求むべきものありとなさば、禪の眞生命は失はれ、「世諦」に處する機用は現れず狂瀾怒濤さかまくこの現實境に對して爲す所を知らず、却て世を毒し國家の基礎を危くする邪教なりとして排撃されることがあつても詮なしと云はねばならない。否、臨濟禪師より「癡人儻三界を出でて什麼の處にか去らんと要す」と叱咤惡罵をあびせられるであらう。この意味に於て、吾々は「作務普請の鼓を鳴らして」積極的に動中に於て綿密なる工夫を行ひ、以て佛魔共に窺ひ得ざる境涯を修鍊し大機大用を發揮せねばならない。「鬼窟裏の死禪和」！ 正受老人が白隱和尚の若かりし頃に屢々與へたこの惡毒の語は、吾々が常に胸間に掛在すべきものであらう。

斯の如く、正念工夫不斷相續は、却て變動常なき「塵務の上、世波の間」に於て又躍動する作務普請に於てこそ求めらるべきであり、又その境涯こそ禪的妙境なりと祖師方は教示されてゐる。この祖師方の教示の上に立つて考ふる時、吾々は生産に對して如何なる態度を執るべきか。前にも述べた様に、佛敎者は生産者でない。禪者はあくまでも禪者である。禪者の生活の中心は禪そのものに在らねばならない。一步たりとも、禪そのものより禪者の生活の中心が逸脱することがあれば、

それは墮地獄の業であると云はねばならない。然しながら、塵務の上、世波の間、作務普請に於ける綿々密々なる正念工夫こそ却て求めらる可く尊ばるべきものであるとなされる以上、祖師方が生産を肯定されてゐる消息を窺ふことが出来るのである。軍人學者政治家商人而てあらゆる生産者、夫々自己の持場々々に於て最大の能力を發揮しながら、而もその塵務の上世波の間に於て正念工夫不斷相續の妙諦を發揮することこそ、禪的眞骨頭であるのである。禪者は、行住坐臥打坐看經作務普請に於て「總に是れ正念工夫の全體」たる境地に在つてこそ、眞にその本領を發揮してゐるのである。かくして、吾々は、祖師の教示に基いて、生産業者の業務を肯定することが出来る、「治生産業背實相と違背せず」と云ふことが出来るのである。而て作務普請、之を經濟的な人間活動として見る時、それは多くの場合生産的行爲たる側面を現してゐる。例へば

一、師、凡作執勞必先於衆主者不忍密收作具而請息之師曰吾無德爭合勞於人既徧求作具不獲而亦忘澆故有一日不作一日不食之語。(百丈禪師の場合。「五燈會元」三、一四)

二、黃檗一日普請鋤茶園黃檗後至師(臨濟)問訊按鏹而立黃檗曰莫是困耶曰纔鏹地何言困黃檗舉拄杖便打師接杖推倒和尚……(「景德傳燈錄」二二、六)

三、師(雲居道膺)合醬次洞山(良价)問作什麼師曰合醬洞山曰用多少鹽曰旋入洞山曰作何滋味師曰得(同上十七、五)

四、一日大普請維那請師（杭州佛日和尙）送茶師曰某甲爲佛法來不爲茶來維那曰和尙教上座送茶曰和尙尊命卽得乃將茶去作務處搖茶碗作聲夾山廻願師曰釀茶三五碗意在鏗頭邊夾山曰瓶有頰茶意籃中幾箇甌……（同上二〇、六）

百丈和尙に於ける作務は云ふに及ばず、祖師方の日常に於て作務普請が如何に重要な意義を有してゐたかは、茲にあげたる二三の例によつても知り得る。拽石搬土、薪を柴り畑を耕し或を茶を摘み味噌を造る。此等是一種の生産的行爲であることは明である。而てこの行爲卽禪的生活となつてゐる所に作務普請の中心的意義があることは云ふまでもないが、祖師方はこの行爲自體をもこれはこれとして尊ばれてゐた様に思はれる。これはこれとして尊ばれてゐたと云ふても、禪者が經濟的な生産者となることを尊ばれてゐたと云ふ意味でないことは云ふまでもない。生産的行爲も、作爲せず自然に禪的生活卽ち正念工夫不斷相續中の内容になり得たのであるから、祖師方は尊ばれてゐた。否、祖師方に於ては、かゝる生産的行爲も生産的行爲でなく正念工夫不斷相續そのものであり、かゝる行爲の場は綿々密々なる行持の道場そのものであつたのであるから、これはこれとして尊ばれてゐたと云ふのは、祖師方に於ける眞の消息ではなく、吾々の眼にこの様に映するに過ぎないと云ふ方が適當であらう。

斯の如く考へて來ると、吾々が生産的行爲に對して執る可き態度は自ら明である。生産者の生産

的行爲に就てはもはや云ふに及ばず。吾々自身が直接生産的行爲をなす場合があれば、この行爲は綿々密々なる行持そのものゝ一つであつて始めて祖師方の惡罵を免れることができる。若し祖師方のかゝる行爲を唯形式のみに於て模倣することがあれば、祖師方に於ける消息に白雲萬里と云はねばならないであらう。

### 三

祖師方の日常に於て作務普請が斯の如く重要な意義を有してゐたことを、禪宗教團の經濟の立場から見るならば、當時の教團生活の一つの資源が作務普請にあつたであらうと想像しても大なる誤はあるまいと思ふ。而て、この作務普請は、世を降るに從て、綿密なる日常の正念工夫上の行持としても、又生活資料を得る行爲としても、段々と其の重要性を失ふ道程を辿つて來てゐることは否定することが出来ない。白隱和尚の「掃地勤行……作務普請……是れ古代人真正修練の體裁にして、近代は廢れ果てたる芳躅に侍り」(於仁安佐美)、全集五、二八〇——二八一と云ふ語は、此の間の消息を物語るものと見ることが出来る。事實、「景德傳統錄」のみに就て觀ても、唐末より以後、作務普請に就ての記録は漸次乏しくなり、之に伴つて王やその他の上層階級との交渉の記録が増加してゐる。この傾向は、支那のみならず日本の禪宗教團に於ても、世を降るに從つて顯著になつて來てゐることは争はれない事實である。このことは叢林の庫下が潤澤になり學者が増加す

るに至つたことを物語るのであるが、必ずしも宗風が眞實に擧揚される様になつたことを物語るとは云ひ得ない。白隱和尚の、「往々に師學ともに常住の福澤を榮耀とし、多衆開熱を宗風とし……衣食の結構を佛道に充つ……悲んでも悲むべきは、得難き人身を名聞の奴婢に責め使ひ、上も無き佛を妄縁の塵埃に吹き埋ませて……苦汗の財施を掠め取るには、目連鷲子の神通を得たり」。「遠羅天釜」卷之中、全集五、一六三——一六四」と云ふ痛罵は、唯單に學者を鞭策する語とのみならずとは出來ないと思ふ。

さて、原始佛教時代より、佛者の經濟生活の資源の中心をなしてゐるものが、信施であることは云ふまでもない。ある時代には、又ある寺院に於ては、寺領よりの収入が中心資源となつてゐて、信施が中心資源となつてゐないかの如き觀を呈してゐる場合も決して少くないのであるが、元來寺領そのものが信施——或る場合には歪曲された信施從て信施ならざる施物——の生み出せるものであるから、信施が佛者の經濟生活の中心の資源たることに於ては原則的にはこの場合も異なる所ないと云はねばならない。この信施に就て祖師方は吾々兒孫に如何に説かれてゐるか。思ふに此は語らずして自明のことと思ふが、少しく祖師方の教示を窺つて見よう。

信施は之を施す者と之を受くる者との兩者有て始めて成立することは云ふまでもない。而て、信施が眞實信施とならんが爲に重要な條件は、功德を豫想せざることであらねばならない。功德を

豫想し功德を得んが爲の信施であれば、それは始めより信施でなく、かゝる心構へを以てしては、世界の富を積み施すとも、「無功德」と祖師の叱咤を受けねばならないであらう。祖師方は斯の如く信施に對し從て信施者に對して嚴肅なる態度を要求される以上、之を受くる者に對しても同様な否其れ以上嚴肅なる態度を要求されるであらうことは當然である。この施者と受者との態度に就ての無難和尚の「自性記」中の次の語（「白隱和尚全集」第一卷、四四五）には、寔に滋味深きものがある。

ある人佛事に布施のしやうをとふ。予いはく、終に三錢のふせする人なし、三錢のふせをうくる坊主なし。かれとふ、三錢のふせとはいかやうなる事ぞ。予云、天下に誰か三錢をしむ人あらんや、たとへば千貫萬貫のふせも、三錢出す心にてせよといふ事なり……又請くる坊主萬貫のふせも、三錢のごとくにおもはざれば、直に其弔あやまる。後世はちくしやうとなる事疑なし。

無功德底の信施！施す者も無功德底に於て之を施し、受ける者も之を無功德底に於て受ける。惜みなく施され、素直に他事にとらはるゝ心なく之を受けると、恰も「三錢の布施」の如くであれば、此は正しく無功德底の信施であつて、而もこの無功德底の信施は實はそのまゝ無量の功德を有する信施である。かくて始めて、施者は、「佛法興隆の志願深固なる」（斯經和尚「願心道場旨趣」）「白隱和尚全集」第八卷二八一）外護者となることができる。施者に就ては之れ以上語るを要しない。

吾々が更に深く省察せねばならないことは、吾々が施物を受ける態度である。この態度は現實の世  
 界に於て禪者が眞實禪者となるかならぬかを決定する契機とも云ふ可きものである。禪者が如何な  
 る信施をも眞實無功德底に於て受け得るならば、彼は、眞實の禪者であり、信施を受け得る完全な  
 る資格をも具有するものであり、又その故にこそ、彼は眞實信施に對する法施を爲し得る人であり  
 たくまざる感謝の念を表現し得る人であるのである。されど此が如何に至難なことであるかは云ふ  
 を要しないであらう。されば古德方が之に就て示し殘されてゐる語は、或は辛辣或は親切、吾々の  
 深く味ふべきもの少くない。例へば

一、師（雲門文偃禪師）上堂云故知時雲澆醜逮于像季近日師僧北去禮文殊南去遊衡嶽若恁麼行脚  
 名字比丘徒消信施苦哉苦哉……（景德傳燈錄十九ノ十八）

二、汝還知麼三界無安猶如火宅且汝未是得安樂底人只大作群隊于他人世遮邊那邊飛光野鹿相似  
 但知求衣爲ニスルコトヲ食若恁麼爭行他王道知麼國王大臣不拘汝父母放汝出家十方施主供汝衣食  
 ……須具慚愧知恩始得……（玄沙宗一大師の場合、同上十八ノ十）

三、石霜山慶諸禪師……抵大滄山法會爲米頭一日師在米寮內篩米滄山云施主物莫拋撒師曰不  
 拋撒滄山於地上拾得一粒云汝道不拋撒這箇什麼處得來師無對滄山又云莫欺這一粒子百千粒  
 從這一粒生師曰百千粒從這一粒生未審這一粒從什麼處生滄山呵々笑歸方丈（同上十五ノ十五）

此等は何れも信施のみに就て正面から教示されたものではないが、吾々は之等に於て祖師方の信施に就ての辛辣な或は親切な教示を味得することが出来る。

斯の如き祖師方の教示を十分に味得し自己の者と爲し去り、道眼具足の禪者の面目に恥ぢざる底に至らねばならない。然らざれば、臨濟禪師より徒に「十方の信施を消」する瞎漢と罵られ、或は他時異日茸となりて信施の恩に報いねばならない（臨濟錄に云ふ「道眼不明盡須抵債索飯錢有日在。何故如此入道不通理復身還信施長者八十一其樹不生耳」と）。無難和尚は、その「即心記」中の「我庵門徒中に法度之事」に於て、「坊主は天地の大極惡也、無所作而渡世。大盜人也」(「白隱和尚全集」第一卷四一五)と云ふてゐられるが、「大極惡」「大盜人」となるとならざるとは、所謂「君子愛財取之有道」で、唯吾々の態度一つに懸るを思へば膚に粟を生ずるを禁じ得ない。

#### 四

信施及び信施者に對して執るべき態度は、自ら信施物の消費に對して執るべき態度である。即ち之を目的すること天下の公器の思を以てし、無限の感謝と節度とを以て消費せねばならない。又信施物は生産された物であるから、感謝は生産者に對して延長され、生産者の勞苦をゆめ忘れてはならないのである。

次に、前にも述べた様に、原始佛教時代より、佛者の經濟生活の資源の中心は信施にあつた。而

てこの時代に於ては信施は主として行乞によつて得られた。この行乞は、佛教が印度より支那へ支那より日本へと傳來すると共に、又これが發展分化して諸宗が成立すると共に、次第に行はれない様になり、後世では纔に禪門に於てのみ行はれるに至つた。この間に於て、禪門に於ては、生活の資源が、主として行乞と作務普請とによつて得られた時代もあつたが、後世になるに従て寺領や祈禱によつて得られる程度が高くなつた。此等の問題は、禪宗教團の經濟生活の推移を考察しそのあべき相を省察せんとする場合忽諸にすべき問題ではないが、茲では唯一瞥するに止めこの稿を了りたいと思ふ。

原始佛教々團の經濟生活に於ては、一方に於て生産的行爲は禁止せられ、他方に於て消費の苦行主義・節制主義が極端に尊重された。この消費生活上の態度は彼の「四依法」に最もよく現れてゐる。而て、茲で特に指摘せねばならないことは、原始教團に於ては殆どあらゆる生産的行爲が禁ぜられ、石を扱き土を搬ぶが如き行爲さへも比丘の威儀に悖るものであり比丘は之に直接たすきはるべからざるものとして禁ぜられてゐたのである。「密教究」第七十號、拙稿「原始佛教々團の經濟生活」(參照)。然るに、支那及び日本に於ては、特に六祖以後の禪宗教團に於ては、作務普請が尊重されるに至つた。作務普請が尊重されたことは直接生産的行爲が尊重されたことを意味するのでないことは既に述べた通りであるが、兎に角尊重される様になつた。この變化の契機を何處に求むべ

きであらうか。予の大膽なる想像が許されるならば、この契機は次の三つの點に求めらるべきものと思ふ。先づ印度民族は觀想靜慮を生命とするに對し、支那民族は觀想靜慮を尊重せざるに非るも之と併行して實際的活動をも尊重すると云ふ兩者の民族性の差異、第二に原始教團の戒律には餘りに煩瑣な形式が多かつたが、支那教團の戒律は形式よりも精神を尊重する大乘的戒律に段々進化するに至つたこと、而て第三は、原始教團の經濟的事情と支那の教團の經濟的事情の差異。今や紙幅は盡きたから第一と第二とに就ては暫く措き、第三のみに就て卑見の要領を記して置きたい。所謂「三武一宗の厄」の一つなる唐武宗の廢佛の原因として道教の廢佛運動と武宗の宗教政策をあげることが出来るが、武宗が宗教政策として廢佛を行ふに至つた重要な原因の一つとして當時の教團の社會的經濟的力をあげねばならない。この廢佛に際して、良田の沒收せらるゝもの數千萬頃、開放された寺院の奴婢十五萬人、歸俗せしめられた僧尼二十六萬五百人と云はれる。(稻葉君山氏「支那社會史研究」による)。この數字は當時の教團の社會的經濟的力が如何に大であつたかを物語る。この「厄」の當時に於ける禪宗教團の社會的經濟的力はどんなであつたらうか。徳山はこの厄の爲に「避難於獨浮山之石室」(「景德傳燈錄」十五ノ三)とあり、龜洋の慧忠國師はこの厄にあふて一應「爲白衣」(同上二三ノ三一)とあるから、禪宗教團も亦この廢佛の對象となつたことは明である。然し他宗教團程の社會的經濟的力があつた様には思はれない。唐末宋初となれば大衆の數五百

人千人或は千五百人と數字が「景德傳燈錄」に見ゆるから、この頃には非常な社會的勢力をこの教團も有する様になつたと見ねばならない。社會的勢力の増大は經濟的勢力を伴ふのであるから、この頃に於ては相當大きい社會的經濟的力を有する様になつたと云ひ得る。この様にこの「厄」の當時に於けるこの教團のこの力は他宗教團の如きものでなかつたと思はれる。況や、禪宗寺院が律寺院に從屬して存在してゐた當時や、この「厄」に先きだつこと數十年百丈和尚が獨自の清規を制定し禪宗寺院を律寺院より獨立せしめた當時に於けるその經濟的力は、固より云ふまでもなからう。然し、百丈和尚以後に於ては、新興の獨立教團のことであるから、大衆の數五百人千人とまでは行かずとも、その經濟的力に相應せざる多くの大衆を擁する様になつたであらうと想像される。原始教團の生活の精神と形式とを出來得る限り攝取した當時の禪宗教團が、前者の排斥した所の作務普請と云ふ一種の生産的行爲を尊重するに至つた主要なる原因は、かゝる事情に求めらるべきものと思ふ。然し、吾々が注意すべきことは、禪宗教團に於ては作務普請を唯單に經濟的行爲として尊重せず、之に於て正念工夫不斷相續と云ふ宗教的な價值が見出され尊重されてゐることである。このことは既に述べた所であるが、要するに、經濟的價值より宗教的價值へと、作務普請の價值が轉換されてゐることを注意せねばならない。

以上、信施及び作務普請を中心として、禪宗教團或は個々の禪者は、その經濟生活に於て如何な

る態度をとるべきかを、祖師方の教示を規準として考察して見たのであるが、元來、如何なる方面にせよ、祖師方の消息は予の如き者が容易に窺ひ得ざるものである。思ふに、祖師方の眞意を誤り解し、その痛烈なる叱責を受くるや必定と思ふ。誠に慚愧の至りである。

附記。本論は此の特輯號の首題たる「東洋文化と禪」中の一問題として予に課せられたものに就ての一試論にすぎないが、本論の題目が「東洋文化と禪」なる問題中に於ける地位つまり「東洋文化と禪」なる問題中の一問題としての性質に就ては全然考察を行つてゐない。この意味に於て予の本論に對する責は果されてゐないから他日之を果さねばならないが、右の問題に對する予の基本的な見地のみは記して置きたい。即ち、東洋文化の一側面たる東洋的經濟の觀念と實踐とは東洋的特性がある、この東洋的特性の成立には佛教の影響決して少くない。而て佛教の影響中に於て禪の影響は大にして異色ある様に思ふ。本論はこうした見地に立つての卑見の展開の一部分である。